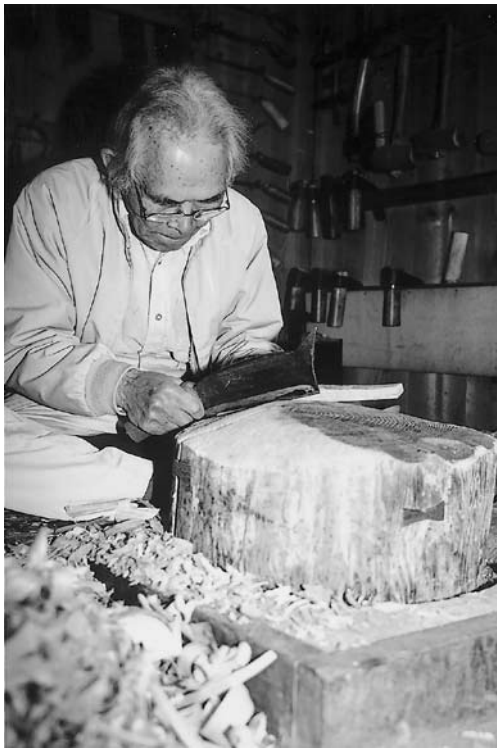
市立五條文化博物館　平成19年度春季特別展
「五條モノづくり紀行ー地場産業からふるさとを追うー」



6月10日(日)まで開催中

○記念講演会
- ■日時　5月20日(日)午後2時～3時30分
- ■場所　市立五條文化博物館1階研修室
- ■定員　50人(事前の申し込みが必要です)
- ■テーマ「大塔の杓子作り」
- ■講師　森本仙介先生(奈良県立民俗博物館主任学芸員)

○その他関連企画

■開催日　5月27日(日)、6月10日(日)

■会場　特別展会場

《展示解説》

担当学芸員が展示を案内します

▼時間　午後2時～2時30分

《「肥後守」で鉛筆を削ってみよう》

小刀で鉛筆を削ってみませんか(危険はありません)

▼時間　上記の日の随時(展示解説の時間は除きます)

■申込・問合先　市立五條文化博物館　☎24・2011

新町と松倉豊後守重政
まつくら ぶんごのかみしげまさ

第2回　「新町と松倉豊後守重政」

前回4月号では、新町と松倉豊後守重政400年記念事業実行委員会が立ち上がり、来年平成20年、400年記念の年に向かって、さまざまな事業に取り組んでいることを報告させていただきました。今回は前回予告したとおり、400年記念のきっかけとなった、松倉豊後守重政と新町誕生のころのお話をさせていただきます。

松倉豊後守重政の詳しい人物史や年代記はまた次回以降に述べることにしますが、今回は、郡山筒井家の家老職の出であった松倉重政は、戦国の世の最後に現れた武勇の誉れ高い武将であったところから説明します。

慶長5（1600）年9月、関ヶ原の戦いに重政は27歳（数え年）で参加します。彼は井伊直政隊に加わり、つまり東軍、徳川軍に加勢して、めざましい軍功を立てています。この戦のおり、家康公の覚えがめでたかったと史書にでております。その後、家康は征夷大将軍になって江戸に幕府を開きますが、豊臣家は大阪城にあって、西軍の残党は大阪以西にまだまだ多く残り、とくに真田幸村らが蟄居させられていた和歌山県九度山などは、家康からは危険極まり無い土地と見られていたものと思われます。

慶長13（1608）年筒井家は改易され、家来筋であった松倉重政もいったん所領を失いましたが、十市、高市、宇智郡で一万石余を拝領し、あらたに大名となって同年7月、二見城（五條市二見）に入城しました。松倉重政35歳の時ことです。二見城は、目と鼻の先に九度山をのぞむ土地です。家康にとっては目の上のたんこぶ、真田父子ににらみを効かすため、最も信頼の置ける松倉重政を二見城に配したものと推察されます。ですから、家康は、重政を真田幸村に匹敵する武勇の将と見ていたとも考えられるのです。

慶長13（1608）年7月、大名として松倉豊後守重政は五條に入部しましたが、彼は武勇の将だけではないことをすぐさま証明して見せます。後年、城作りや土木工事の才能を島原城の築城で遺憾なく発揮していますが、五條においては、都市作りの才能を城下の人々、そして大和や近隣の藩にも見せつけたのに相違有りません。彼は着任するや、城下の二見村と五條（須恵）村の間、吉野川右岸沿いに700米ほどのまっすぐな道路(新町筋)を造ります。丁度紀州から伊勢に向かう街道筋を拡張整備したことになります。そして、その道の両側に間口をほぼそろえて、百軒に少し足りない程度の商家を各地から誘致しました。

商家を短期間に集めるために、重政は「諸役免許のこと」と諸税を徴収しないことを約束しましたので、宇智郡に限らず、近隣や遠くの土地からも有望な商家が多数集まり、瞬く間に新町筋に町家が立ち並びました。こうして出来上がったのが今の五條市の新町です。その当時、新しく造り上げられた町ですから「新町」と命名されましたが、400年も前に起源を持つ由緒のある街並みであること、そしてそのきっかけとなった人物が、異才の武将、松倉豊後守重政であったことを、良く理解していただけたことと思います。

しかし、新町はただ古い町というだけで価値が有るわけではありません。その後、新町は商業の町、街道筋の要衝、筏流しの中継地点として、五條、須恵、二見と一帯なって発展し、その中心に、町民の自治があったことを挙げておかなければなりません。町民の自治は寛政7（1795）年五條に代官所が設置されて後も続きますが、庄屋を長く続けられた新町の柏田家に、その歴史が古文書として多数残されています。その古文書を通して、五條における町民自治の歴史がようやく彷彿としてきました。

五條の発展の歴史や自治の歴史については、また後の機会に述べたいと考えています。どうぞご期待ください。

（新町と松倉豊後守重政400年記念事業実行委員会委員長槇野久春）